

## 研究ノート

教師の実践を支える『学習研究』誌の意義について考える  
—奈良女子大学文学部附属小学校  
『学習研究』復刊第200号を中心にして—

創価大学教職大学院  
若井 幸子

## 要 約

本学教職大学院の教育課題実地研究における、学びの場、奈良女子大学附属小学校（以下、奈良女附属小）は、大正期以来、児童中心主義の理念に基づいた教育実践を積み重ねている。

毎年行われる教育課題実地研究で奈良女附属小を訪問し、教師の在り様を探っていると、児童も教師も共に学び、主体的、自律的な学びを児童と共に目指す教師が存在することが今までの研究で分かった。その、教師の在り様、教師が学びを深め、思索を継続してきた経過は、奈良女附属小が発行し続けている『学習研究』誌（奈良女子大学文学部附属小学校学習研究会発行の教育誌『学習研究』、以下『学習研究』と記す。なお、「文学部」と記載されていたのは、第407号まで）の存在で確かめることができる。

今回は、木下竹次（以下、木下）が、1922（大正11）年4月に創刊した『学習研究』創刊の辞に「学習即ち生活であり、生活直ちに学習となる。日常一切の生活、自律して学習する処、私共はここに立つ」と示した理念が、時代の風雪を経て現在にどのように受け継がれているかを『学習研究』復刊第200号<sup>1</sup>、そして、その発刊の経緯を中心に追究し、奈良女附属小の児童中心主義における一貫して変わらない普遍的な理念や実践の継承を探ってみた。勿論、復刊400号等、区切り目の記念誌は存在するが、特に第200号には現在の奈良女附属小での「書くことの」重要性が明確に確認できる箇所が随所に見られる。「日記」指導をはじめ「書くこと」に力を入れ、優れた文章力を育てている実践の継承が顕著に見られ、また、復刊の喜びや感動、『学習研究』の発行を支えてきた様々な人々の情熱が明確に表現されている。その経緯を読み解くと、『学習研究』は教師の学びを支え続けてきた存在であると捉えることができる。

---

キーワード：児童中心主義 自律的学習 『学習研究』 日記指導

児童を取り巻く教育環境の現状を踏まえ、状況を的確に判断し、周囲の智慧や条件などを取り入れたり生かしたりする教師の在り様が、創刊の理念とともに『学習研究』に継承されているのである。そこには、時代を超えて、児童中心主義における教育活動の普遍的な視点が存在し、自律的な学びを支える児童の生活に着目した学習即生活、生活即学習という実践の継承が見られる。そして、また、その継承は、学びを深める教師の存在があって確かなものとなっている。

## I 大正期新教育運動について再考する

日本における大正期の新教育運動について、中野光は、様々な研究者の説を検討し「われわれが定めなくてはならない視点の一つは、大正自由教育が教育方法の改革に果たした役割であり、そこにどのような遺産を確認できるかということである。教育方法は、いうまでもなく、つねに一定の教育目標に奉仕するものである。また、方法自体の中に目標が反映していると見なくてはならない。(中略)大正自由教育が吉田昇のいうように「教育方法を思想的に自覚するようになったわが国最初の典型」であるとするならば、その方法的自覚を促したものは何か、それが、わが国の教育方法の歴史的発展にどのような役割を果たしたのかが究明されなくてはならないだろう。」<sup>2</sup>と述べている。

大正期新教育運動の歴史的評価は定まったとは言えないが、『日本新教育百年史』<sup>3</sup>の完結にあたって、『日本新教育百年史』月報1967(昭和46)年2月号の中で、執筆者の杉谷昭は、「教育政策・制度・内容・方法などが中央史的に捉えられる明治前期につづいて、明治後期から大正期にかけての教育の普及により、教育の理論と実践とが地方に定着をみせはじめた時期を研究の対象としたからである。(中略)大正十三年三月八日付発行の鹿島町尋常高等小学校研究発表録の黄色くなった一頁にプロジェクト・メソッド、ダルトン・プランなどの文字が読み取れるとき、往時の訓導たちの活躍が偲ばれ、戦後民主教育の推進の中心が、やはり、それらの実践校であることを発見して伝統の強さを思い知らされた。」と述べ、また、米田貞一は「児童の訓育も強制命令でなく自覚自律を主眼にする。(中略)児童の人間性と生活体験を重んじ、教師の注入教授より児童の自発学習を主とするやり方でJ・デューイ(J. Dewey)の児童中心教育と同じ考え方に立っている。この新しい教育は大正四年に吉良荒太が校長になってから着手し、後任の高田校長らがそれを継承発展させ、昭和初年まで十数年にわたって実践されたもので、河野訓導中心に全校職員が多年の熱心な研究と実践でこれを育て上げたといえる。…中央から遠い九州の一角で、独創的な新教育ののろしをあげたことに対して、私は教育史的な誇りと喜びを感じる」と当時の様子を語り、土器屋忠二は、「魂の形成における少年期的原型のもつ意味はほとんど決定的である。大正少年のそれは、理想主義とヒューマニズムを骨格とした阿修羅の精神で

あった。(中略) 大正期の新教育は真教育であったといわれることの特別な意味合いがうかび上がってくるように思われる。それは依然として、帝国主義と軍国主義の基盤と外皮に覆われてはいたものの、その胎内において、はじめて「人間教育の原型」をうみだそうとしていたものであった。」と大正自由教育の意義を述べている。

中野が言うところの「教育方法を思想的に自覚するようになったわが国最初の典型」であるとするならば、その方法的自覚を促したものは何か、それが、「わが国の教育方法の歴史的発展にどのような役割を果たしたのが究明されなくてはならない」とすれば、奈良女附属小の『学習研究』が、廃刊の危機を乗り越え、今日第486号(2018年4月号)まで「主題」を立て、教師の「実践」を掲載し続けていることに着目し、この『学習研究』の内容を読み解いて、何を継続して研究し続けているのか、『学習研究』における普遍的なものは何かを探ることは、大正新教育運動の意義を考える糸口になると言えるのではないか。

また、想像するところ、杉谷の「教育の理論と実践とが地方に定着をみせはじめた」、あるいは「伝統の強さを思い知らされた」の言葉から奈良女附属小ははじめ大正期における教育実践は国内各地で実践的に受け入れられていたことがよく分かる。このことも、大きく言えば「教育方法を思想的に自覚する」萌芽が全国各地に生まれつつあったとも言える。

また、米田の「児童の訓育も強制命令でなく自覚自律を主眼にする。(中略) 児童の人間性と生活体験を重んじ、教師の注入教授より児童の自発学習を主とするやり方」とあり、土器屋が「帝国主義と軍国主義の基盤と外皮に覆われてはいたものの、その胎内において、はじめて「人間教育の原型」をうみだそうとしていたものであった。」と述べているように、当時、木下が提唱した児童中心主義における「学習指導主義」、『学習研究』創刊号に記された「学習即ち生活であり、生活直ちに学習となる。日常一切の生活、自律して学習する処、私共はここに立つ」との理念、自律的学習法の理念は、戦争という悲惨な時代を超えて、『学習研究』とともに継承されている。

奈良女附属小における児童中心主義の教育に、大正期以来、時代の変遷を超えて、教師が児童の可能性、自律的な学びができる存在であると確信して、教育に取り組む常に変わらない姿勢、視点があるのか、理念や実践とともに語り、切磋琢磨し、時代を超えて学び合う教師の学びが誌上から読み取れるのか、また、その具体例が見て取れるのか、復刊第200号を超え、第486号(2018(平成30)年4月号)までの経過を見ながら述べてみたい。

## Ⅱ 『学習研究』復刊第200号、そして現在へ

『わが校百年の教育』<sup>4</sup>を紐解いてみると、1922(大正11)年4月創刊された『学習研究』は、太平洋戦争への傾斜の中で教育雑誌統制のため、1941(昭和16)年3月、

231号をもって休刊を余儀なくされた。『学習研究』復刊第1号は、1946（昭和21）年7月号となった。

戦後『学習研究』復刊第1号には「平和的文化国家としての祖国日本の再建は、敗戦という最も悲惨な深淵に沈淪しきった我が国民を、明るい彼岸に導く最大の歴史的課題である。…かかる民主的国家社会建設は真の民主的教育によって先行されねばならぬ。…我が「学習研究」は過去二十年に亘り、児童の自発的学習法の理論と実際について血みどろな活動を続け、我が教育界に独自の役割を演じてきたのである。…本誌も亦その名は同じく「学習研究」ではあるが、その使命は全く新たな性格をもって出発せねばならぬ。これ本誌が新第一巻第一号として各位にまみえる所以である。本誌は単に我等同人の発表機関たるに止まらず、熱意ある革新教育家諸君の協力を期待し、以って洋々たる新日本教育創造の重大使命を遂行したいと念願している。」とあり、戦後民主主義の体制について言及しながらも、児童の自発的学習法という視点は変わらない。

さらに、『学習研究』復刊第10号には、重松鷹泰（以下重松）が着任し「真田、木下、武田三代主事の刻苦経営された伝統をおもい、直面している教育界の課題を考えますと、奈良女子大学附属小学校のなすべき仕事の重大なことを感ぜずにはおられません。幸いに従前の業績も「学習研究」を通じて集積されており、さらに現在の同人の人格そのものの中に生きております。そしてまた「学習研究」を通じて全国の教育実践家と常に血脈が通っております。真摯着実な歩みをつづけることによって、道をきりひらき、社会の期待に沿いたいと念じております。」と述べている。さらに、奈良プランを確立した重松は、『学習研究』復刊第200号で教師の成熟について論を寄せ、「教師は成長し、そして、成熟していくものである。もちろん、途中で成長をやめてしまう教師もあり、ある段階を乗り越えることができなくて枯死してしまうものもあるが、生涯を通じて成長し続けることが、教師の義務であるとともに、大きな喜びなのである。」と述べ、教師は子どもたちと一緒の環境にしながら、地域社会や同僚の教師、教師を取り巻く環境はもちろんのこと、未来を代表している子どもたちと日々接し、これと格闘するということは、教師を成長させ、成熟させる究極的な契機であるとし、「自らの心（人間性）を隠蔽し、かたくなな防壁をつくって、子どもとも、教材とも、同僚や親たちとも、表面的機械的な接触交渉しきしない場合には、成長は止まり、何れ彼は枯死しなければならなくなるのである。」と論じた。奈良女附属小の教師が成長し続けている背景が見えてくる内容である。『学習研究』には教師の実践が蓄積され、しかも、奈良女附属小の教師自身の中に蓄積されてきた実践力が妥当なものであるのかどうか、実践が全国の教師に公開され、即、様々な学校での実践とつながっていることがこの記述からも分かる。また、岩花春美（2009）<sup>5</sup>も、「学習法」の継承と展開に着目し、重松が着任して以降、奈良プランが確立し、現在まで、『学習研究』を基底にした研究が充実し、学校、家庭、社会の連携がよくなされていると

捉えている。

1969（昭和44）年8月に『学習研究』は、復刊第200号を迎えた。復刊特集には、教師、関係者が『学習研究』復刊第200号をどのような思いで迎えたか赤裸々に綴られている。

「私の著書に「教育の科学化」というのがあることになっているが、現在ではわたくしの手許にもないし、おそらく書棚におさめておられる人もあるかないかであろう。これは北海道の先生方が学習研究の論文を十編ほど、集めて、一冊の小さい本にして、わたくしの講演をきく予備資料にされたものがもとで、…学習研究の論文には一番努力したので、（下線：筆者）そんなにまでして読んで頂くということを光栄にも思い」（重松）

「雑誌の魅力は、学校の魅力のせいだろうが、この雑誌の読者はふしぎに永続きするようである。学校の変わらぬ教育方針（下線：筆者）が、いついつまでも日本の教育界の大きい光であってほしいと思う。」（白井勇）

「この間ある数学者から奈良の教育の古いものが手に入らないかと尋ねられました。…その方は数学教育史研究者でしたので、清水甚吾先生、池内房吉先生の論説などを話していました。心ある人ならだれでも奈良の「学習研究」とは、日本の教育の歴史をつくりあげてきたものであるということを忘れてはいません。」（下線：筆者）（堀米勢吉）

「たしか神奈川に出張した時のことだと記憶している。研究会場で、見知らぬ先生から「先生の実践を学習研究で拝見した」と言われ、ずいぶん驚いたことがある…つねに教育の本質を追求し、教育現場に多くの示唆を与えていく貴重な研究誌として、今後ますます充実発展していくことを祈念したい。」（下線：筆者）（渡部陸平）

また、「200号を迎えて」と題して、辻田右左男は「学習研究を始めた木下先生はもうおりません。しかし、かれの意志は脈々とこの雑誌に今も流れています。その点においては、木下は死んでもなお生きているといえそうです。」（下線：筆者）（中略）とにかく、木下にも、開拓者、先駆者にありがちの多少の見当はずれはあったでしょう。そうでなければ「学習研究」という当時としては二つともわけのわからない概念を結びつけた雑誌の発刊に踏み切ることはできなかったでしょう。（中略）こんな時代に木下は勉強でなく、学習という旗幟をかがげました。「学習原論」「学習各論」という書物を精力的に書いて教育界を根底からゆさぶったのです。はじめてこのことばを聞いた全国の教育者たちは、文字どおり空谷に人の足音を聞く思いがしたでしょう。これはまず子どものパーソナリティを前提としたことだったのです。子どもたちが自発的に、自分自身の個性に応じた学び方をする。極端に言えば教師不在ともいえる革命的な学習法でした。」<sup>6</sup>と（下線：筆者）述懐している。

そして、また、『学習研究』復刊第200号には、子どもの自主的行動についての研究、日記指導の実践、学級なかよしの実践、授業研究、指導が掲載されており、平成の今



に発刊されたと言ってもよいほど、教師が児童の生活に視点を置き、自律的な学びを奨励している姿が見て取れる。そこには、「子どもの自主的行動」—創造的な行動の事例—として、子ども達が自分の生活を改善・進歩させようという姿勢で生活し、くらしをくふうしようという目標を持って行動する姿が記されていたり<sup>7</sup>また、「たくましい追究と冴え」と題して、1年生か3年生まで綴られた日記を分析したり、子どもの自主的な追究の姿を捉えたりしている。<sup>8</sup>

### Ⅲ 『学習研究』に受け継がれてきたもの—日記指導の事例を通して

上述の経緯でも、創刊当時の理念が継承されていることは、随所で確認できるが、その中でも特に、「日記指導」が現在に引き継がれている点を詳しく辿り、『学習研究』に受け継がれてきた一例として以下に示してみたい。

『学習研究』復刊第200号記念特集の主題は「行なう」ことの学習である。上述のように、今井鑑三（以下今井）・倉富崇人（以下倉富）・長岡文雄（以下長岡）がそれぞれ「実行力を育てる」「子どもの自主的行動」「たくましい追究と冴え」を論じている。その三氏ともに、子どもの行動記録をもとにして論じている。

今井は「実行力をそだてる」<sup>9</sup>の中で、

「朝は、目ざましが鳴ると、すぐにおき、服を着て、母といっしょに台所へ行きます。ぼくは、このごろ目ざましをかけてねるので、あすは六時四十分におきると思っていると、自然に目がさめます。」と記し、実行できる強さが家庭の事情を踏まえ、生活時間帯を母親と相談して実行している児童の実践を紹介している。

倉富は「子どもの自主的行動」<sup>10</sup>の中で、

「わたしは、てつぼうがにがてなので、やすみじかんになって、「くらじさん、てつぼうをしに いこう。」といいました。くらじさんが、「であいさんと、たぐちさんは。」と、いいました。わたしと くらじさんと、たぐちさんと、であいさんで、てつぼうの まえまわりの きょうそうを していました。そうすると、だんだんじょうずに なってきて、てんきの日には友だちをさそって、かならずてつぼうをしています。」との文を紹介し、この子は、組でもっとも鉄棒こわがっていたが、友だちをさそって行動している。それが彼女の進歩に大きく関係していると読み取っている。

長岡は「たくましい追究と冴え」<sup>11</sup>の中で、

H君の1年生、2年生、3年生にわたる事例を紹介している。1年の秋にまつかさを拾ったことから始まった彼の追究を、H君自身の言葉で追っている。

「ぼくは、がっこうへもっていったけれど、先生がやすみじかんにいそがしいので、まだみせるひまがありません。つくえの下においたままです。ぼくは、きょうも、ま

つかさのたねのはねのかたちに、なんまいもきって、でまどの上にのぼって下にとばしてあそびました。」

そして、2年生の初夏のころ、ふきの葉やひまわりの葉に書いた文字や顔が葉の成長につれてどう変わるかを実験していた。「ママ、ひまわりにもかいてあるんだよ。ちょっと来てごらん。」と自分の追究を話したところ、母親が落書きと勘違いして、一方的にふきの葉をちぎってしまったという。このエピソードは『学習研究』に綴られ、そして、3年生のときのカブトムシの詳細な日記へとつながっていく。このH君の持つ「たくましい問題追究の生活と芽え」の事例も『学習研究』の誌面を通し、論が展開されている。

また、斎藤一之（以下斎藤）は、日々取り組んでいる日記を「子ども記」<sup>12</sup>として掲載し、「そうだったのか」とのタイトルをつけて以下のように紹介している。

K君の日記 ・ぼくの みみでか

「ぼくの みみは、大きいので いいこともあります。いやなことも あります。いいことは、こそそこそこえもきこえます。いやなことは、みみが しもやけに なったら かゆいのが すぎて いたいです。」

この他に・でんきしらべ ・ぼくのざいさんばこ ・ぼくはれきしのはなしをします が掲載されている。

T君の日記 ・つくしとり

「日かげには ながくて ほそいのが あった。日なたには みじかくて がっしり したのがあった。(中略)あとで はらっぱにいった。すると じどう車学校の よりも ながかった。(中略)じどう車学校のより はらっぱの ほうが 雨が たくさん かかるからだと おもう。」

Tさんの日記 ・チューリップ

「チューリップさん どうして はやく さかないの。さむいのかしら。

おとなりや 学校だったら みんな さいてるのよ。さきたくないの。 はやく さいたら はやくかれる からね。 でも やっぱり はやく さいて お日さまや ちょうちょうなどを みたいでしよ。

斎藤は「千変万化する行動の実態から、ああそうだったのかと、その子を決定的に捉える靈感の類を持ちたいものだ。」と最後に記している。K君 T君 Tさんそれぞれに温かい眼差しを持って接していることがよく分かる。

このように『学習研究』復刊第200号の約半分の原稿執筆の中核をなす部分で「日記」が使われていた。「こども記」は、現在の『学習研究』にも引き継がれ、今号(2018

－第485号）では子どもの書く力についての考察が記され、「教師の日記」も掲載されている。

それでは、『学習研究』復刊第200号で中核をなしていた「日記指導」は、今、どのような様子なのであろうか。

現在も奈良女附属小では、入学式の翌日から日記指導は始まっている。

筆者が「書くことによる児童理解」を『創大教育研究』第24号に投稿し、「日記指導」は、教科指導の枠に止まらず、奈良女附属小の児童理解に大きな役割を担っていることについて紹介し、考察したことであるが、以下に再確認したい。

すなわち、現在の奈良女附属小に於ける日記指導について探ってみると、『学習研究』第455号で、歴代の副校長、梶田萬理子（以下梶田）・日和佐尚（以下日和佐）・谷岡義高（以下谷岡）の各氏が、「学習と生活をつなぐ日記」「日記指導の要点と日記の効果」「1年生の日記の育ち」と題して、第455号のテーマである「自律的に学ぶ子どもを育てる学習法」の中核に日記指導が存在することを論じている。

梶田は、1920（大正9）年に清水甚吾訓導が「日誌に面白きこと多し」「毎日のことを文章と写生とをもって表現す」「思想豊富なり」「この児童にして毎日の日誌書けるは感心」と感想を入れ、毎日書くことの重要性を指摘していたこと、1926（大正15）年には、秋田喜三郎訓導が「英子の日記 お母さんの病気」と題して子ども向けに全国の児童に日記の見本を示していること、また、1929（昭和4）年には河野伊三郎訓導が毎日の日記を書くことによって、物の観察が緻密となるので幼少の頃より習慣化し、日記を書くことが大切であると述べている歴史をふり返っている。その上で、

- ・学習力の基礎づくりとしての観点から、表現力は気づく力に比例するとして、日記は考え続ける自分、問い続ける自分を作る時間になっており、自ら気づく力を養っている。
- ・自分を見つめる目を育てるという観点では、日記を書き続けることによって自分を見つめる目が深くなる。誠実に自分の生活をふり返る習慣が身につく。落ち着いて自分という人間を冷静に見て、ゆとりを持って考え行動する力が備わる。
- ・人と人をつなぐ観点から、日記は学習と生活をつなぐだけでなく、人と人をつないでいる。自分の学びを教師や友だちに知らせたり、家庭にその学びをつないでいるだけでなく、教師は日記を読むことによって「子ども理解」を深めることができると言及している。

日和佐は、日記指導の要点として、入学式から卒業式の二日前まで、具体的にどのように書くのか、学年ごとの書き方や、活用の仕方、保存の仕方まで詳しく述べている。

ちなみに、六年間で書く日記の量は、平積みすると約一メートルの高さになる。一学級40人あたり、六年間で平積み40メートル、13階建てのビルに相当するそうだ。教師にとって読む活動はまさに修行であるとも記している。



日和佐も梶田と同様に、日記を書くことによってさらなる独自学習への高揚があり、次の学習への提案なども多く書かれるとしている。児童自ら、学習をつなぎ、意欲を高めることが日記を書くことを通じて行われている。また、学校と家庭がスケルトン状態で協働の足場を作ることができる。そして、何よりも子どもが一日の生活を見つめ、ふり返ることによって自分との対話ができ、生活の発展・生活の拡充が行われるとしている。

谷岡は、「一年生の日記の育ち」と題して、担任した一年生の日記を分析し、一年間の成長の軌跡を辿り、その価値を五点に集約している。即ち、

- ・小冊子（日記をまとめたもの）を発行し、教師から見た授業の記録、子どもの日記、教師の日記の三つが合わさっていて、それらを子どもも親も読むことができた。
- ・日記の内容書く量などを自由にしていったことで質の高い日記になっていった。
- ・日記帳が全ての学習の総合ノートになり、子どもの一番大切なノートになった。
- ・さんぽ・活動内容のメモ記録と、辞書・参考書などでの疑問の調べなおし習慣が、全て、日記に集約されていた。
- ・子どもの思い、教師の思い、親の思いが合わさった日記学習であった。

以上のように「日記」は、今の奈良女附属小に於ける学習の中核的存在として受け継がれているのである。

すなわち、『学習研究』復刊第200号での、今井・倉富・長岡も、斎藤の「子ども記」も梶田が指摘したように、毎日書くことの重要性を認識し、学習力の基礎づくりとなっている。また、自分を見つめる目を育て、日記は学習と生活をつなぐだけではなく、人と人をつないでいる。このことは、教師は「日記指導」を実践することによって「子ども理解」を深めることができるとの意義を示しており、奈良女附属小では『学習研究』を通じて、子ども理解をするという教師の実践が受け継がれていると考えられる。『学習研究』復刊第200号を読み解いてみた時、確実に「今」に継承されている「日記指導」を発見することが出来た。

#### IV 『学習研究』から見えてきたもの

実は、「日記指導」だけではなく、教師の視点、創刊号に示された「学習即ち生活であり、生活直ちに学習となる。日常一切の生活、自律して学習する処、私共はここに立つ」も当然のことながら、『学習研究』復刊第200号を経由して、現在にも継承されていることも分かる。

また、筆者が「学習研究」誌の中で毎号楽しみに読んでいる外部関係者からの特別寄稿（筆者も「成長し続ける教師達に学ぶ」と題して寄稿させていただいた：『学習研究』第466号）も『学習研究』復刊第200号では、福岡県甘木市甘木小学校早川佐賀

男が、「書く活動をとおして」との内容で寄稿している。また、第485号の特別寄稿は東京学芸大学櫻井眞治の「奈良の授業に表れる山場と、その場を支えているもの」とあるように、今に引き継がれている。

『学習研究』復刊第200号を経て、その後、『学習研究』復刊第450号を迎え、記載されている内容はどのようなものか、『わが校百年の教育』で見えてみると、以下のようになる。

「創立百周年の平成二十三年には、戦後の『学習研究』誌が復刊されてから四五〇号を刊行することができた。表紙には、「創立百周年記念」とロゴを入れて、一年間にわたり次のようなテーマで編集を進めている。以下に、年間テーマ「自律的に学ぶ子どもを育てる学習法」として、

四四六号	平成二十二年八月号	「朝の会」論
四四七号	同 十月号	「めあて」論
四四八号	同 十二月号	「独自学習」論
四四九号	平成二十三年二月号	「おたずね」論
四五〇号	同 四月号	「相互学習」論
四五一号	同 六月号	「ふりかえり」論

かつて、大正昭和の先輩たちが実践してきた独自学習や相互学習に学び、現在の社会状況や奈良女子大学附属小学校の子どもの事実をとらえながら、平成の時代にも脈々と「奈良の学習法」の実践が続けていることを、私たちは『学習研究』を通して発信している。」<sup>13</sup>とあった。

現在の奈良女附属小も、朝の会、めあて、独自学習・相互学習・さらなる独自学習という学習のリズムを大切にしているが、創立百周年であるからこそ、一番大切にしている中核の学びの姿を取り上げていると考えられる。めあてを立てて、自身の生活の中から独自学習を出発させ、相互学習において様々なおたずねをし合う相互学習、そしてさらに自身をふり返りさらなる独自学習へと進む学習法は、この『学習研究』を通じて連綿と次代に引き継がれている。日記指導だけではなく「奈良の学習法」という骨格もまた、創刊号から『学習研究』復刊第200号を経て、第450号、現在へと継承されている。すなわち、『学習研究』を媒体としながら、創刊号で示された「学習即ち生活であり、生活直ちに学習となる」との理念が、復刊第1号、第10号、第200号に、さらに第450号へと続き、今日まで、地下水脈のごとく流れ通っているのである。

この『学習研究』が、1922（大正11）年4月創刊以来、今日まで発刊され続けている事実の重みほど大きいものではなく、戦時中の中断こそあれ、『学習研究』復刊第200号に記されている続刊への情熱が随所に記されていることをもってこの『学習研究』の存在意義があるとも言える。しかし、とはいえ語り残しておくことの価値ある実践があつてはじめて『学習研究』の存続を教師が願い、価値あるものを残し、広めるという作業に労を厭わず取り組むのではないだろうか。別の捉え方で見つめてみると、

普遍的な姿、それは教授法であったり、理念であったりするが、教師が常に自身の実践をふり返し、自己を点検し、そのありようを問い続けるために大きな役割を果たしているのが、『学習研究』の存在であると見られるのではないか。その意味で、教師の追究の姿、姿勢を伝え残すために『学習研究』は存在しているとも言えるのである。「日記指導」をする教師としてまた、「奈良の学習法」を実践する教師として。そして、創刊号以来見つめてきた児童中心主義の教師の在り様、実践の姿を後世に示すために。

『学習研究』復刊第200号のあとがきにこのように綴られている。

「ついに復刊200号となりました。みなさまご支援のお蔭です。(中略) 記念特集としては簡素ですが、わたしたちの気持ちの表現です。しかし、問題は今後にあります。「創業は易く、守成は難い」ということばがありますが、まったくその通りです。(中略) 重松先生からは「教師の成熟」と題する教師論をいただきました。お互いが考えさせられる論旨です。教師としての若さ一年齢ではなく一を持続させるものを追究したいものです。」このように教師論で『学習研究』復刊第200号は結ばれている。

## VI 教師の実践を支える『学習研究』の存在意義を考える

各学校や教育機関等が自身の教育の成果を発信している様々な研究誌は、たくさん存在する。

その意義を簡単に指摘すると、1、現在行われている研究の成果の発表する場であり、それは即ち他の視点からの批判を生かし、さらに自身の研究を深めるためにという意義があるかと思う。また、それ以上に、2、時代が変遷しても変わらないもの、残しておきたいものを次代に伝えるという働きも持つ。勿論、普遍性や永遠性の追究というような深い捉え方もできるかもしれない。

重松が『学習研究』復刊第200号で「教師の成長と成熟とは、前記の諸関係に支えられているが、それら諸関係の根底に存するものは、子どもたちである。子どもたちはこのような間接的な形で、教師の成長を支えるだけでなく、もっと直接に教師の成長と関係してくるのである。教えるべき子に教えられるということが、実は教師の成長を支えるもっとも重要なものなのである」<sup>14</sup>と述べているが、目の前の子ども達、また、社会は日々変化し止まることはない。教育理念や教育活動、その実践が時代を超えて受け継いでいきたい普遍的なものであるといえるかどうかは、その継承の度合い、そして教師の願い、その深さによって、また、時代を超えても必要とされる度合いによるものと考えられる。筆者はこの『学習研究』の継承された経緯を辿るなかで「児童中心」という子どもたちを思う熱意や真心は時代を超えて奈良女附属小の教師の心の中心にあり、実践の姿に見て取れること、そして、「日記指導」も独自学習・相互学習・独自学習も、当たり前のことだが日々の教育活動において、教師の心の真

ん中にいつも「児童の生活や行動」が据えられているということ、何よりも、その様子を伝えたいと言う熱意、心が『学習研究』を支えているのであるということを読み取った。即ち、教師の実践を事実上支えているのである。

奈良女附属小に集ってきた教師の熱意が創刊以来『学習研究』発刊の底流に流れており、その教師の熱意が途絶えなかったことによって、今日まで発刊し続けることができ、その熱意の深さ、大きさによって、この『学習研究』が今日まで継承されてきたと考えられる。

また、「守成は難い」とあるように、継承されているものを現在も活用しているかどうか、また、その内容に教師が心を動かされ、主体的に『学習研究』を支えようとする情熱が受け継がれているかどうかによって奈良女附属小の未来も決定されてくる。

現在の学習指導要領で求められている主体的・対話的・深い学びにつながる研究が『学習研究』第483号(生活学習力)第484号(主体的・対話的で深い学びを創造する環境)第485号(個の学びをつなげる学習)第486号(奈良の学習法と深い学び)で展開されている。ともすれば、大正期以来、このような学びを実質的に追究し続けてきた事例として奈良女附属小が取り上げられる機会があるが、何よりも、その学びを継承し続けてきた教師の在り様に今一度深く掘り下げてみる必要があるとの思いを強くした。

創刊号、から出発して『学習研究』復刊第200号を経て、その後の現在に至るまでの『学習研究』は、奈良女附属小の教師が日々の実践の中で、個々の児童のきわめて個人的な日記指導をはじめ、教師の学びの授業実践などを継承しながら、教師自身が成長していくという事例として捉えられた。筆者が、今まで6回にわたり、奈良女附属小で学んだことを『創大教育研究』に投稿させていただいて来た最大の理由は、奈良女附属小で出会った先生方の姿にたくさんの学びがあったからである。一言で表現することは難しいが、教育課題実地研究に何うたびに、成長し続けている教師の姿を見ることができたからである。

上述の日記指導をはじめ「奈良の学習法」の継承は当然のこととして、『学習研究』誌上には、どこまでも一人ひとりの児童の可能性を信じる児童中心主義の教師の姿が『学習研究』に見て取れる。そしてこれこそが、『学習研究』の根底にある教師論であり、児童中心主義とともに先ず、第一に伝え残している普遍的な姿であり、奈良女附属小学校が発展し続けている本質ではないかと思う。

本学創立者は、第15回学生部総会1974(昭和49)年3月3日)で、「普遍性というもの、そのみではどうしても観念的にならざるをえない性格をもっている。したがって、普遍性を真に生かし、価値あらしめるためには、個の特殊性であるところの土俗性を包含するにたるものなければならない。」と述べている。奈良女附属小の教師達は個々の児童を中心にして、個の現実から学習をはじめ、その学びの姿を指導す

る教師というものがどのような姿なのかという普遍に迫っていると考えた。またさらに、本学創立者は、第18回滝山記念フェスティバル1989（平成1）年7月8日）において、「何事も、ゆるぎない基盤が簡単にできあがるはずはない。ありとあらゆる経験と試行錯誤を重ね、苦しみ、あるときは攻撃を受け、揺さぶられ、失敗もし、それから一切に耐えながら、なお理想に向かって歩みとおしたとき、初めて永遠性を持った盤石な建設がなされる」と学生に語られた。筆者は、奈良女附属小の歩みが教育の永遠性につながっていくことを期待している一人である。

## Ⅶ おわりに

今秋（2018年）は、11回目となる奈良女附属小の教育課題実地研究が予定されている。全国に公開されている学習研究集会や発表会、『学習研究』の執筆、多数の見学者、訪問者の対応で多忙な中、一人ひとりの本学大学院生の研究課題や質問に、いつも真心と温かさ、そして、率直な心で対応してくださる先生方の姿に奈良女附属小の教育の度量の深さと教育者の在り様を学ばせていただいている。事前に、奈良女附属小の歴史や木下竹次の『学習原論』などを学び、院生自身の研究課題を設定するのであるが、参加して初めて「子どもたちの可能性はすごい」「先生方との懇談ではじめて奈良の学習法の意味が分かった」等々と気がつく。奈良女附属小で学んだことを記し、学び続けることが、学びの場を提供してくださる先生方児童の皆様全ての皆様に心から感謝することになると考える。

## 引用・参考文献

- 1 『学習研究』復刊第200号－8月 奈良女子大学文学部附属小学校学習研究会1969年8月
- 2 中野光 『大正自由教育の研究』黎明書房1976年 p.18
- 3 小原国芳 『日本新教育百年史』8 玉川大学出版部1971年2月
- 4 『わが校百年の教育』奈良女子大学附属小学校2012年12月 pp.188-189
- 5 岩花春美「木下竹次の「学習法」の構造的特性」奈良女子大学文学部教育文化情報学講座 年報第7号 2009年 pp.55-57
- 6 『学習研究』復刊第200号 奈良女子大学文学部附属小学校学習研究会1969年8月 pp.4-6
- 7 同 pp.15-19
- 8 同 pp.22-25
- 9 同 p.12
- 10 同 p.17
- 11 同 pp.22-24



- 12 同 pp.32-33
- 13 『わが校百年の教育』 奈良女子大学附属小学校2012年12月 p.189
- 14 『学習研究』 復刊第200号 奈良女子大学文学部附属小学校学習研究会1969年 8 月  
p.70